

死刑について考えてみませんか

街を行くみなさん

この近くに東京拘置所があります。

そしてこの東京拘置所に、死刑を執行する刑場があります。

去年の12月20日にも、ここで3名の死刑執行がありました。

「おばあちゃん、死刑ってどうしてあるの？」

「悪いことして、こいつは悔い改めんなあという人を国が殺すためだよ」

「悪いことってどんなこと？ 人のお金ごまかしたり盗むことか？」

「あれま、お金盗るだけで死刑だったら、日本の政治家やエライサンの半分はすぐ死刑になってしまうがな。人を殺した場合だよ」

「そうかあ。でも人を殺すことは悪いことなのに、なんで国が殺すのはいいの？」

「うるさい子だね。この忙しい時に」

目をおおうような悲惨な犯罪に接したとき、多くの人は、「こんなことをする者は死刑になってあたりまえだ」と言います。

とりわけ、愛する家族や親しい友人を奪われた人たちは、殺してもあきたらない怒りと悲しみを抱くでしょう。

でも、「だから死刑で犯人を殺せばいい」ですませてしまってよいのでしょうか。死刑で何が解決するのでしょうか。

今、東京拘置所には推定で25名の死刑確定者がいます。この中には、裁判で十分な弁護がなく不当に刑を重くされた人、無実を訴えながら再審の開かれない人、長い拘禁生活で精神に変調をきたした人などもいます。そして一人一人がさまざまな問題を抱えているのです。

どんな人間でも境遇いかんによって殺人犯にもなりえます。個人では償いきれない重い犯罪であればあるほど、なぜそのような事件が起こったのか、どうすればそれは避けられるのかを、わたしたちは真剣に考えなければならないはずです。

死刑は被害者の遺族の悲しみ、苦しみを決していやすものではありません。犯人を死刑にするだけで、もっと深いところにある被害者遺族の心の痛みに対しては、ほとんど救いの手をさしのべることがなかったのが現状ではないでしょうか。

街を行くみなさん

わたしたちの身近に「死刑」があります。

立ち止まって、いっしょに考えてみませんか。